

ながつき  
—令和元年長月（9月）のことば—



正光寺旧本堂

『わたしが<sup>せ</sup>背<sup>さか</sup>を向けようとも逆<sup>けつ</sup>らおうとも 決<sup>けつ</sup>して見<sup>み</sup>捨<sup>す</sup>てようとはなざらない』

9月は年に一日限りの？敬老の日が定められています。姥捨て山はご存知でしょうか。食糧事情の貧しかったその昔、老人が口減らしのために山に捨てられるという風習のことです。

信濃の国のある農夫も村の掟に従わざるを得ず、年老いた義母を捨てに行かなくてはならなくなりました。彼は義母を籠に乗せ、姥捨て山へ向かいました。ところがその道すがら、背中に背負われた老婆が、しきりに木の枝を折っては道々に捨てていくのです。これに気付いた息子は、(気丈なお袋でも山奥に捨てられるのはさすがに恐ろしかろうな。この落とした枝をたどって、また家に帰ってくるつもりか…) 未練とも思え、なおさら不憫にも思え、複雑な想いで山道を登って行きました。どれほど歩いたでしょうか、とうとう捨て場所と思しきところに辿り着きました。彼は義母を背中から降ろし、別れを告げて帰ろうとしたその時、老婆は息子の袖を掴んで言いました。「これでお前とも最後の別れじゃ。身体に気をつけて豆に暮らせよ。随分と山奥まで入ったから、お前が家に帰るのに道に迷って困るだろうと、道中ワシが小枝を落として目印をしておいたから、それを頼りに無事家に帰れよ。」そう言って、老婆は息子に手を合わせたのでした。その義母の姿を見て彼は泣き崩れました。村の掟とは言え、年老いた母親を捨てに来ているのに、母はこちらをこんなに憂っている。こんな母をどうして捨てられようか。息子は思わず草むらに両手を着いて泣き伏し母親に詫びます。しかし義母は毅然としてさらに山深く入って行ったのだそうです。

この逸話には親の子を想う慈愛が示されているのですが、同時に仏や菩薩が我々凡夫に対する慈悲を表しているのです。ほとけさまたちは、いかなる人をも救わずにはおられないのです。しかも自分に背く者、逆らう者さえも救おうとされるのです。いや、背けば背くほど、逆らえば逆らうほど、ほとけさま方は見捨ててはおかれぬのかも知れません。道しるべに小枝を手折っては手折っては私たちを導いて下さる。それに気づくか気づかぬかが私たち凡夫の問題なのでしょう。